FD NEWS
甲南FDニュース
No.16

INDEX

1 FD講演会開催報告
2 教育学習支援センターの取り組みについて

発行:甲南大学FD委員会　2016年3月

1 FD 講演会開催報告

2015年 12月 2日(水) 18:00～

50名を超える教職員が参加

■講　演
「研究者の自由と責任ー昨今の大学改革議論のなかで」

講　師：井野瀬　久美惠　先生
（文学部教授・日本学術会議　副会長
科学研究における健全性の向上に関する
検討委員会委員）

2015 年度の FD 講演会では、文学部の井野瀬先生を講師にお迎えし、「研究者の自由と責任 - 昨今の大学改革議論のなかで -」というタイトルで、ご講演をいただきました。テーマの「研究不正」というキーワードから、研究者として遵守すべき項目の列挙が始まるのでは、という予感がありましたが、それとはスケールが違った大変興味深いご講演でした。

ご講演では、日本の研究不正に関する取り組みの歴史の紹介、それらの取り組みが組織としての責任管理の方向にあるという分析、2014 年の国立大学評価委員会による人文社会科学系学部・大学院の見直しに関する発言の背景の解説、大まかに分けて上記の三つのトピックが取り上げられました。

日本の研究不正に関する取り組みの歴史では、2000 年に発生した旧石器遺跡の捏造事件を皮切りに、2006 年に文部科学省による「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」の制定がなされ、それでも問題が継続的に発生したことから、2014 年「研究活動の不正行為への対応等に関するガイドライン」へと更新されていく過程が紹介されました。ガイドラインの見直しを通じて、研究活動の健全化においては、研究分野によって慣例が大きく異なる点について共著者の記載方法を例に説明がなされました。成果主義が広がる現状においては研究の健全化を研究者個人の責任に帰すのではなく、研究機関の管理責任を問う方向に進展していることが紹介されました。次いで、成果主義の広がりの中で出てきた、2014 年の国立大学評価委員会による人文社会科学系学部・大学院の見直しに関する発言は、国内においてもちろん、海外においても大きな驚きと非難が寄せられたことが紹介されました。最後に、日本学術会議が自然科学と人文・社会科学のバランスの取れた発展を求める声明を出したこと、それらをふまえて、甲南大学はどうあるべきか、という問いかけでご講演は幕引きとなりました。

本学においても、研究不正に関わる様々な取り組みの中で、例えば「教員は研修を受けなさい」、「資料は規定の期間保存しなさい」と働きかけが始まっています。端的に見ると、これは自由闊達な研究活動に冷や水を浴びせるようなものとも考えられます。しかしながら、ご講演を通じ、こういった働きかけは、研究者を過度な責任から解放するものでもある、ということを知ることができました。ご講演では、日本に限らず、様々な事例を通じ、社会に対峙しなければならなくなった研究者について考えさせられました。ご講演の中では、地震予知が失敗し、研究者が実刑判決を受けたイタリアの事例が紹介されました。研究者として社会に対してコミットすることを求められるというのは、今日の実学を重視する風潮からすると推奨・歓迎されるべきことなのかもしれません。しかし、科学的見地から何かを言わなければならないとき、それはすべて研究者個人の責任においてなされるべき、となってしまうと、研究活動の萎縮を招くことになると感じました。2014 年の国立大学評価委員会による人文社会科学系学部・大学院の見直しに関する発言をはじめ、成果主義の教育への介入が続いている状況をふまえ、甲南大学が社会の中で存在感をさらに発揮していくためにも、教員と大学はよりよい関係を築いていかなくてはならないことを感じました。

2 教育や学習に対する支援とは
―教育学習支援センターの取り組みについて―

2015年4月、教育学習支援センターが発足しました。前身の情報教育研究センターが実施していた、ITを活用した教育・学習支援の更なる実践や、一般情報科目の開講とともに、同年6月より、大学企画室が担当していた、全学的な教育・学習への取り組みの試行実施やFD委員会の事務、学内外の情報・データを収集・分析し教育や学習に活用するIRといった業務を引き継ぎました。

今回は、教育学習支援センターが、甲南プレミアプロジェクトとして取り組んでいる、「ラーニングアシスタント（LA）を活用した授業の支援」と、「学生の文章能力の伸長を目指すライティングサポート」について、それぞれ、中心となって下さっている先生へのインタビュー形式で、その内容やメリットをご紹介します。

ラーニングアシスタント（LA）を活用した授業の支援

【どんな取り組みをしていらっしゃいますか？】

学生が能動的に学習するといっても、限られた時間内に課題をこなし結論づけなければなりません。学生どうしグループを作り、お互いに意見を出し合い助け合いながら解決に導く手法を取ることが多いのですが、それをサポートするのが教員とLAの役目です。受講人数が多い授業の場合、教員だけで学生のサポートを行うことは困難です。そこで、何人かのLAと教員との共働作業により学生をサポートすることになります。

当センターでは、LAを必要とする授業を募集し、応募した教員に受講済の上級生などLA候補者を挙げてもらいます。そして、全ての候補者に連絡を取って必要人数のLAを確保します。派遣された授業におけるサポート活動については、毎回必ず紙一枚の報告書を書いてもらいます。彼ら彼女ら個人では解決できない課題や問題があると判断した場合には、当センターの教職員で対応にあたります。

【2015年度はどのような授業にLAが参加しましたか？】

当センター発足以前からサポータを投入している経済学部のプロジェクトゼミやキャリア教育など学部学科は多岐にわたります。ふたを開けてみると、理工系の学部からのご依頼が結構多かったことが印象的でした。河合塾が2010年から行っているアクティブ・ラーニングに関するアンケート調査でも、理工系学部のニーズの高いことがわかっています。

【LAはどのような授業のときに呼ぶべきでしょうか？また、そのときの注意点はどのようなものでしょうか？】

各学部の基礎ゼミなどでは、数名から十名前後の教員が分担して少人数教育を行うという考え方が定着しています。そういった手法で授業運営がうまく行っている場合には、LAをあまり必要としないものと考えられます。

一方では、100名以上の大講義室における学生の授業参画態度が良くないという話も耳にします。こういった授業の運営のしかたを工夫し、授業時間の何割かにアクティブ・ラーニングを導入してLAを投入すれば、学生の授業への参画態度が良い方向に変化する可能性が出てきます。ただ、受講生数が100名を超えるとアクティブ・ラーニング自体が行いにくくなるとも言われていますので、チャレンジングな課題になりそうです。

学生の文章能力の伸長を目指すライティングサポート

【どんな取り組みをしていらっしゃいますか？】

2015年度は、経済学部1年次配当の必修科目「入門マクロ経済学」において、約400名を対象として、計4回のレポートを課しました。計4回のレポート課題のテーマは、1年次の後期の課題であること、そして、「コピペ」を困難にすることを重視して、第1回は「各自の前期の成績評価をふまえた学習上の改善点」、第2回は「自分の知的能力の特徴を中心とする自己分析」、第3回は「卒業までの将来計画の策定」、そして、第4回を「授業内容に即したマクロ経済現象に関する分析」としました。計4回のレポートのうち、第2回と第4回の2回のレポートについて、ライティングサポートを受けて修正したものを提出させました。

【ライティングサポートを通じて、学生の成長を実感できるものがありましたか？】

曖昧な表現や論理的な関係が不明確な表現が格段に減っていきました。一般に、書く技術というようなものは短期間で向上するものではないと思いますが、それでも、毎回の授業内容の要約を書いて提出させるリアクション・ペーパーに書かれている文章をみても、授業実施期間中の4か月足らずの間で格段にレベルが上がりました。それまでは単文の羅列だったものが複文になり、接続詞の用い方が上手になり、まとまった長文が増えていきました。

【本学におけるライティングサポートの課題はどのようなものですか？】

今回、ライティングサポートの実施にあたっては、経済学部の3・4年次生を中心的なサポータとして起用しました。それなりの成果はありましたが、やはり、専門的な知識・技術をもった担当者を確保することが最大の課題だと思います。この点においては、木股文学部長に研修等で大いに助けていただくことができました。また、学部教育の課題ですが、ライティングを体系的に教える授業がありません。「どの学生も論理的で明確な文章が書ける」ということの実現を大学全体の目標として設定し、対策を急いで講じる必要があると考えています。

さらに詳しい情報・報告はホームページへ！

大学トップ▶センター・研究所・図書館▶FD ―甲南大学のFDへの取り組み―

問い合せ先
FD委員会ではFD活動やFDニュースについてご意見・ご要望を受け付けています。
教育学習支援センター事務室　TEL078-386-4312（内線5851）　MAIL lucks@adm.konan-u.ac.jp